仙査説話の意味

―伊勢物語八十二段をめぐって―

山本登朗

一

伊勢物語の八十二段は、主人公と惟喬親王の親しい交わりを語る章段である。主人公「右のむまのかみ」は、惟喬親王の供をして訪れた交野の渚の院で「世の中にたえて桜のなかりせば…」の歌を詠むが、その後、帰路の途中に届けられた酒を飲もうと、「よき所をもとめ」た一行は、「天の川といふ所」にたどり着き、やがてその河原で、あらためて酒宴が始まる。

…みこにむまのかみ、おほみきまゐる。みこののたまひける、「『交野を狩りて天の川のほとりに到る』を題にて歌よみて、さかづきはさせ」とのたまうければ、かの馬のかみ、詠みて奉りける。

かりくらしたなばたつめにやどからむ天の河原にわれは来にけり（下略）

目前の「天の川」という川の名を利用して、それを天上の「天の川」に見立て、「たなばたつめ」つまり織女に宿を借りようと言い立てた一首だが、この歌は、すでに言われているように（後藤祥子氏『源氏物語の史的空間』東京大学出版会・昭61など）、単に七夕だけをふまえて詠まれた作ではない。そもそも季節は春、桜の花盛りの頃であって、七月ではないのである。

ここでふまえられているのは、一般に「仙査天漢訪問説話」などと呼ばれている中国の伝承である。「仙査」の「査」は「槎」に同じく、いかだ。「仙査」は、仙界に行くいかだの意。「天漢」は天の川をいう。漢の武帝から黄河の河源を探るよう命じられた張騫（ちょうけん）が、いかだに乗って黄河を遡り、天上の「天の川」に到達して引き返したという話（『歳時広記』所引、荊楚歳時記）と、海岸に住む男が、毎年近くに漂着する不思議ないかだに興味を持ち、食糧を持ってそれに乗り込んで、これも同じく天上に到ったという話（荊楚歳時記・七月）の二つの形が伝わっているが、そのどちらかをふまえて、「かりくらし」の一首は詠まれている。「我々もまた、あのいかだに乗った人々と同じように、いつのまにか天上の『天の川』にまで来てしまった」と、一首は言うのである。

二

この仙査天漢訪問説話は、はやく奈良時代の『懐風藻』以来、しばしば日本人の漢詩に詠み込まれてきた。中でも平安時代初頭、山崎の離宮を愛した嵯峨天皇が現地で詠作し、後に『文華秀麗集』に収められた次の作は、よく知られている。

一道長江通千里　一道の長江千里に通ず。
漫々流水漾行船　漫々たる流水行船を漾（ただよ）はす。

風帆遠没虚無裡
疑是仙査欲レ上レ天

風帆遠く没す虚無の裡。
疑ふらくは是れ仙査の天に上らむとするかと。

（河陽十詠、四首・其二・江上船）

ここでは、淀川での船遊びの情景が、仙界に通じるいかだで天に昇っていくようだとたとえられている。

それから約百年の後、菅原道真は朱雀院での重陽の宴の席上、宇多上皇の命に応えて、次のような詩句を詠作している。（前半四句を省略する。）

潭菊落レ粧残色薄
岸松告レ老暮声頻
池頭計会仙遊伴
皆是乗レ査到二漢浜一

潭菊粧を落として残色薄る。
岸松老を告げて暮声頻りなり。
池頭に計会す仙遊の伴。
皆是れ査に乗りて漢の浜に到らむ。

（菅家文草四四二）

「漢」とは、さきにも述べた天漢、すなわち天上の銀河のこと。ここでは、庭の池の水に船を浮かべておこなわれている朱雀院での宴席の情景が、天上に昇る仙査にたとえられている。

これ以外にもまだ、仙査天漢訪問説話をふまえた当時の日本人の漢詩作品はあるが、いま注目したいのは、それらのほとんどすべてが、天皇の行幸や上皇の御幸、ないしは天皇・上皇主催の宴会の際に、天皇・上皇自身、ないしは供奉・侍宴している臣下によって詠まれているという事実である。神仙にも似た天皇・上皇が訪れ、また宴するその場を、作者は仙界、ないしは仙界に通じる世界に見立て、そのように詩に詠むことによって、その場の君臣ともども、俗世間を離れた別世界に遊ぼうとするのである。

伊勢物語八十二段と嵯峨天皇の山崎行幸の際の漢詩の世界がさまざまな点で似通っていることを注意されたのは片桐洋一氏（『伊勢物語の新研究』明治書院・昭和62、ほか）だが、両者の舞台となった場所がきわめて近いことなど、いくつか挙げられる類似点のひとつに、両者に共通して、この仙査天漢訪問説話がふまえられているという事実を指摘することができる。さきに見たいくつかの場合、この説話は天皇の行幸や上皇の御幸、ないしは天皇・上皇主催の宴会の際に作られた詩に用いられていた。いま、伊勢物語八十二段で天の川に来ているのは、天皇でも上皇でもない、惟喬親王というひとりの皇子である。あえて図式的に言えば、ここで惟喬親王は、神仙の世界に遊ぶ天皇や上皇に準じる存在として扱われているということになる。天皇になれない運命を背負った、皇太子でもない親王とその一行が、それにもかかわらず、ここでは、まるで神仙界に往来する人々であるかのように扱われている。この章段、そしてこの場面が持つ、歓楽と屈折の入り交じった独特の雰囲気の源泉のひとつは、まちがいなくそこにあったと言ってよいだろう。

三

数多くの漢詩に用いられてきた仙査天漢訪問説話が和歌

に用いられたのは、現存する作品に限って言えば、この「かりくらし」の歌がはじめてである。漢詩には多用されながら和歌には用いられることがなかった素材を、この歌の作者である「右のむまのかみ」すなわち在原業平は、ここではじめて、和歌に導入することに成功した。それが可能だったのは、この歌が、皇族である惟喬親王の命を受けて、命じられた「題」のもとで、あらたまって詠まれた一首だったからである（山本『伊勢物語論　文体・主題・享受』笠間書院・平13）。さきに見た菅原道真の作のように、帝王の宴席で帝王から題を賜って詠まれる詩を「侍宴詩」ないしは「侍宴応制詩」などというが、この「かきくらし」の一首は、下命者が天皇ではなかったことをひとまず度外視すれば、いわば「侍宴応制詩」ならぬ「侍宴応制歌」ともいうべき作品であった。

『万葉集』以後、和歌はながらく公の場から姿を消し、「色好みの家に埋もれ木の、人知れぬこととなりて、まめなるところには、花すすき、穂に出だすべきことにもあらず」（『古今集』仮名序）という状態に陥っていたとされるが、その和歌が、いまここでは、貴顕の宴席で、漢詩と同じような役割を果たそうとしている。もとより、伊勢物語八十二段に描かれた交遊は、立太子の道を閉ざされた惟喬親王を囲んで持たれた、純粋に私的なものではあったが、そのような場であったにもかかわらず、皇族である惟喬親王に対して仙査天漢訪問説話をふまえた歌を奉り、その場をあたかも神仙世界であるかのように取りなしてみせた表現のありかたは、前述のように一種屈折した感情を通してではあるが、公的な場で詠み続けられていた漢詩の表現世界を一方で強く意識し、それを和歌の世界にとりこむことによって、はじめてもたらされていると考えられるのである。

在原業平の同時代人であり、同じく六歌仙の一人とされる僧正遍昭（良岑宗貞）の出家以前の歌に、次のような一首がある。

五節の舞姫を見て詠める

天つ風雲のかよひ路ふきとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

（古今集八七二・巻十七・雑上）

百人一首にも選ばれてよく知られている一首だが、この歌は、神事にもかかわりを持つ日本の宮廷行事である五節の舞の舞姫を、漢詩文にしばしば見える中国風の仙女に見立てて詠み出されている。五節の舞は本来、吉野山での天武天皇と天女の出会いをもとに始められたという伝承を持つ。この伝承それ自体が、神仙思想の影響を強く受けたものであったが、それを考えれば、五節の舞姫は、本来は遍昭のためでも誰のためでもなく、ほかでもない天皇のために舞を舞う存在と考えられていたはずである。天皇にとって、天女すなわち仙女とのふれ合いは、たとえば楚の襄王が巫山の仙女と契り（宋玉・高唐の賦・文選巻十九）、漢の武帝が西王母と逢ったとされる（漢武内伝など）ように、まことに帝王にふさわしいおこないであった。「天つ風」の一首は、美しい舞姫を見た自分自身の気持をそのまま詠

んだだけの詠作ではなく、むしろ天皇をはじめとするその場のすべての人々の、そしてもちろん、とりわけ天皇自身の気持ちを代弁して詠まれた歌であったと考えられる。

だとすればこの歌も、さきの業平の「かりくらし」の一首と同じように、五節という一種の公的な場で、その場にいる人々を代表して詠まれた、いわば侍宴詩のような性格を持った歌であったと考えられる。それらの歌がそのように、帝王ないしはそれに準ずる人物が主宰する公の席で詠まれるためには、一首の中に中国風の神仙的な要素を盛り込むことが、やはり必要であった。それら神仙にまつわる素材を漢詩から移入したり、神仙的伝承をことさらに強調することによって、「かりくらし」と「天つ風」の二首の歌は、これまで漢詩だけが果たしていた役割の一部を、和歌としてはじめて担うことに成功していると考えられるのである。

四

遍昭の「天つ風」の歌は五節の舞を詠んだ作だが、その五節の舞は新嘗祭・大嘗祭に宮中で舞われたものであり、日本古来の神事とも深いかかわりを持った行事であった（新間一美氏『平安朝文学と漢詩文』和泉書院・平15）。その五節の舞姫が、遍昭の歌では、あたかも中国の仙女であるかのように詠み出されている。天皇が臣下と異なるのは、その系譜が日本神話の神々に連なるからにほかならない。その神格化された帝の尊さが、日本人の漢詩では、中国風に神仙の世界を持ち込むことによって表現されていた。「天つ風」の一首に見られるのも、それらと同様の、神事と神仙の混合、ないしは一体化である。

伊勢物語八十二段の「かりくらし」の一首についても、それと同じ事情を指摘することができる。皇族である惟喬親王に命じられた一首だからこそ、主人公「右のむまのかみ」は、目前の川の名をふまえつつ、あえて仙査天漢訪問説話を用いて、その場を神仙世界であるかのように言い立てていると考えられる。皇族の背後にあるはずの日本の神話世界が、ここでは神仙世界に姿を変えて提示されているのである。

ながらく和歌に詠まれることのなかった日本神話の神々の世界は、ほかならぬ在原業平によって次のように、「神代」の語とともに再び詠み出されるようになる（山本「古今集の時代―「神代」と和歌」『国文学』学燈社・平16・11）。

ちはやぶる神代も聞かず竜田川から紅に水くくるとは
（古今集二九四・巻五・秋下）

大原や小塩の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめ
（古今集八七一・巻十七・雑上）

「かりくらし」の一首には、これらの詠作に至る業平の歌の展開のみちすじが、はっきりと示されているのである。

（国文学者・関西大学教授）